



*mího Hatanaka,*

人が深く眠っているとしても、その顔をじっとみつめることは通常、あまりない。しかし赤ん坊が眠りにについているとき、時を忘れてその顔を見つめることがある。それは“人が生きていること”の観察のようでもある。

今回は、娘の子のそれに纏わる話と、一編の詩を。



【第6話 “無遠慮に” みつめる】

冬に出産をした娘の産後の手伝いに行っていた時期、実家に滞在していた私は一度、母を伴って娘の家に行ったことがあった。遠方に暮らすのは私だけなのである。母はこの2年ほどの間にすっかり出不精になって、天気の良い日に出かけようと誘ってもなかなかうんと言わないようになっていた。この日も私の説得に何とか応じ、朝食を済ませてバスに乗って出かけた。そのような具合だったので、母は娘もいっしょに昼食を済ませたらすぐにも帰ると言い出すだろうと思っていた。ところが結局、日も暮れて私が娘夫婦の夕飯の支度を整えてしまうまで、母は娘の家に行った。3人ともが、何をするわけでもない、赤ん坊が寝ている間に大人は食事やお茶を淹れる程度である。その間に娘は授乳をしたり少し横になったりし、私は台所のことをして、母は時々、椅子に座ったままうつらうつらと舟を漕いでいた。そしてそのほかの多くの時間、母はコットのなかで眠る赤ん坊をただじっとみつめていた。

私が妹を伴って訪ねた時には、二人して赤ん坊の顔をのぞき込みながら「ごそごそ

してるえ。もう起きるんちゃうか?」「ちょっと、〇くん（娘のパートナー）のお母さんにそっくりと思わへん?」「見て、この、服のぶかぶかさがかわいいやんな」、「お姉ちゃん（私のこと）の子どもたちもこんなしてたやんな。懐かしい〜!」、「いや! 目え開いたわ!」などなど…。赤ん坊は一挙手一投足にコメントされて、もしも彼女にモノ言う言葉があったなら、「何を好き勝手なことばかり言うてんねん!」とでも言いたいところであろう。上から覗きこむ大きな顔こそ「どうやねん」、である。しかしこの日は、ただ静かであった。母は時々、口に手をあててくすくすと笑い、またじっと赤ん坊の顔を見つめ、そして短い時間、涙を流した。

「幼稚園にいて、小学校に入って。〇ちゃんが大きいなる姿を、いつまで見られるやろうなあ」

「ほんまやね」

母とふたりで赤ん坊の寝ている顔をみながら、私でさえそのように思うのにと、母の生きる残りの時間のことを思った。母はまた、「不思議やなあ、いつまでも見られるなあ」と言った。それは母にとってだけではなく赤ん坊にとってもきっと大切な時であり、慈しみ、いとおしむ大人の存在と赤ん坊の双方に、みえない“何か”を育む時であろうと思った。モノとしての何かを産み出すわけでもない。瞑想のようでもある。そのような空気のなかにおいて赤ん坊は、環境として実際に守られもして、ゆったりとした安心に包まれている。妹曰く、「人の一生のなかでこんなに無遠慮にじーっと人から見られることってないやんな」という言葉通り、そこが世界の中心であるかのようだ。

そういえば、と思い出したことがある。父が亡くなる最期の時間、やはり私は父の顔を“無遠慮に”見つめていた。看取りの最期の一呼吸を、父は「すっ」と小さく吸ってそのままいのちを終(しま)ったが、そのあまりにもシンプルなわかりやすさが神々しい感じさえして、私は思わずほほえんでいた。息を吸って、吐く。吐いて、吸う。産まれてからずっと、その繰り返しで生きてきた。そしてそれが止まれば、いのちの時間はそこでおしまい。

「人は死んだら、ほんとうに、もう、二度と、息をしないんだ」

そんな当たり前のことを、父は教えてくれた。

娘の子はこの先、この単調な動作を何度繰り返すことだろう。果てしないことのようにも思える。そしてその動作といっしょに周りの者の気配を吸い込んで、この子は育ち生きていくのだ。“無遠慮に人の顔を見つめる”ことは人が生きることのシンプルな仕組みを教えてくれる。どうぞこの子が、よい香りのする、澄んだ空気のなかで育っていきますように。誕生して初めて獲得した“呼吸する”という仕事が、機械的な意味での作業としてだけではなく、豊かに心を育むものであるようにと願う。

【花】

庭に  
植えっぱなしの  
ハーブや こぼれ種で咲く 花

でも時おり  
花屋で 花 を。

冬に、ラナンキュラスの鉢植え

真っ赤な色に惹かれた。

次々に花が開き  
今ではすっかりと 枯れて しまって

いのちはもう 亡い かのよう。

それでもその黄色くなった 立ち姿 が美しくもあり  
赤い花 未だ そのままにして  
ながめている。

球根には  
つぎの 華 を咲かせる  
いのちが蓄えられている



*flower*